

University Academic Repository

「三井大元方勘定目録」についての再論序

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2004-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中原, 章吉, ナカハラ, ショウキチ, Nakahara, Shokichi メールアドレス: 所属:
URL	https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/100

「三井大元方勘定目録」についての再論序

On the Introduction of Restudy about Mitsui Omotokata Kanjyo Mokuroku
in JAPAN

中原章吉

Shokichi Nakahara

<要 旨>

大元方勘定目録（大元方開元目録）をその大要を検討した主要論稿を紹介することによって、その何たるかを明らかにする端緒とするのが目的である。

江戸期の宝永7年（1710年）に創設されたといわれる三井家の決算簿である「大元方勘定目録」を再び研究対象とするにあたって、その全般的把握からその研究の第一歩としようと考えた。

従来、「大元方勘定目録」を中心とする三井家の帖簿の研究は、その発生、背景をめぐって展開してきた¹⁾。

本稿では、「大元方勘定目録」の創成期の技術的内容にポイントをおいて、概括的に明確にしようと考えた。

従来、三井家文書は公開されず、その帖合法は相当に発達していたといわれながら、内容は不明であった。安岡重明教授がこれを閲覧する機会を得て、論考されたものを、小倉栄一郎教授は、その論文中の引用史料を引用し検討されて論文にまとめあげられた²⁾。

私は、この小倉栄一郎教授の論文引用史料等を利用することによって、大元方創設期の大元方勘定目録の内容を概括的に説明することを試みた。

宝永7年（1710年）に創設された大元方から始められた「大元方勘定目録」は、その最初の部分は、「大元方開元目録」と呼ばれ、開始貸借対照表に相当するものと考えられる。

大元方の開設期の三井家の企業全体の正味身代の計算をまず、これは行なっている。各科目の解釈には研究者によって一定しない点もあるので、小倉栄一郎教授の考え方を基準として展開したのである。

すなわち、差引正味金額を3段階に分けて算出していると考ええる。その各段階にそれぞれの意味があると推察される。解釈の余地はあるが、結論として、算出される額が、資産－負債＝資本の恒等式に一致する計算になると考えるのである。そして、原本金額を（ ）に入れて示し、説明のための銀換算額をまた表示している。

〈キーワード〉

大元方勘定目録、三井家帖合、大元方、大元方開元目録、金銀預り方、金銀貸し方、正味有高、入方覚、払方覚、此高遣高、払過、惣家有高、店枕銀、功納、御賄渡、普請入用

1. はじめに

『三井大元方勘定目録』の研究を会計学の面から志向しはじめたのは、現在は名誉教授で、江戸学の権威で学術会議の委員でもある当時は駒澤大学文学部史学科の所理喜夫先生の導きによるものであった。1968年ごろのことである。この研究には、かなりブランクがあって、再び手を染めたのは、私が経済学部長をつとめたすこし前、1990年前後のことだったと思う。同時期に文学部長だった所教授にはいろいろご指導をいただいた。

また、当時、私の大学院博士後期過程のゼミの院生だった飯野幸江君が³⁾、三井大元方勘定目録を私の経済学部のゼミの卒業論文のテーマにしている、ひきつづき大学院修士課程から博士後期過程に至ってもそれを主要テーマとしていた。

こうして断続的につづいた「三井大元方勘定目録」の研究だったのだが、ここのところほとんどこの研究で筆をとることはなかった。

ところが、2001年3月に最終講義を駒澤大学大講堂でやって、駒澤大学を辞任した。そして4月から、新設の「嘉悦大学」の教授に就任した。この大学が西武新宿線の「花小金井」というところにある。したがって三井大元方勘定目録のおいてある三井文庫のある「新井薬師」駅とは同じ西武新宿線の沿線の途中駅にあるということである。

三井コンツェルンが第2次世界大戦後、他のわが国の財閥と共に解体されてから、三井グループとして企業集団の輪を形成した。しかし、1990年代の後半、金融ビッグバンを契機として、財閥グループをこえて、三井グループもグループ再編をはじめた。かつての三井両替店を源とする三井銀行は、住友グループの住友銀行と合併して三井住友銀行となったのは2001年の前半のことである。三井家の流れをくむ三井コンツェルンそして三井グループは、再編成された。

こういった流れは、三井家の会計研究に関して歴史的な企業研究にも連続性という意味でひとつの区切りがきたということであろう。

このような区切りと直接の関係はないが、私の三井大元方勘定目録に関する研究は、三井文庫への地の利に助けられて、再び細々としたものであるが、始められることになった。

三井文庫に、ほとんど数年ぶりといっていい、2001年6月7日に、まだ10時の開館まで40分以上もあるので、玄関の応接机のところで待たせてもらった。図書閲覧証はとっくに期限切れで、再発行してもらった。

三井文庫の所蔵史料は、17世紀半ば以降の三井家の古文書と明治以降の三井系企業の経営資料で、10万点にもなる。『三井家記録文書目録』本号、別号、追号に収録されているのは、三井家編纂室が収集した大元方や越後屋呉服店、三井両替店の経営史料を中心とする三

井家文書である。

私が研究対象としているのは、『大元方勘定目録』という、三井家の営業を統括する機関の決算帳簿である。大元方勘定目録は、1710年（宝永7年）から1873年（明治6年）まで、163年にもわたって残されている。

三井文庫には、これに加えて、越後屋呉服店や三井両替店の本支店、京都糸絹問屋の勘定目録やその補助的帳簿などもある。

2001年6月7日に三井文庫を久しぶりに訪ねてから、15日に三井文庫のある西武新宿線の新井薬師を降り、20日に駒澤大学で名誉教授の称号を授与された帰りにタクシーで大江戸線の東中野まわりで西武新宿線で新井薬師駅をとおるというように、三井文庫に近づくことが多くなってきた。

三井家の残存する文書がすべて三井文庫に収集されているわけではない。三井文庫に類するものとして、数年前まで、三越の文庫が世田谷区駒沢1丁目にあった。百貨店の『三越』の文庫で三越系のレストラン＝ホテルの中にあり、現在その建物・土地は、駒澤大学に買収されて、校舎・校庭に改築されようとしている⁴⁾。

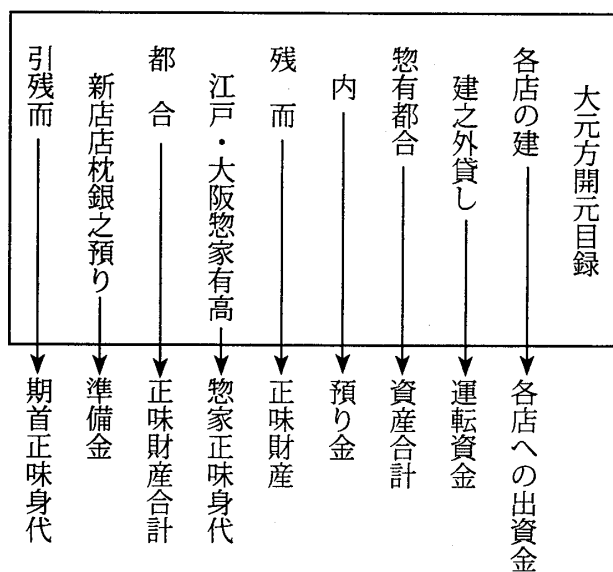
三井家文書は、それでも三井文庫にその主要部分は収納されていると考えられる

現代企業と結びついた三井家の事業の要であった大元方勘定目録の研究の一端をになうための足がかりを再び探求しようと足もとをふみしめて歩きはじめたところである。

2. 三井家帖合の法

三井家帖合は三井家が大元方を創設した宝永7年（1710年）以降のことしかわかっていない。記録がないからである。

図1



期首資産－期首負債＝期首正味財産
 (出典)小倉栄一郎「わが国固有の会計報告の類型」『會計』91巻5号、昭和42年5月、681ページ

三井家帖合を経済史専攻の中井信彦・梅井義雄・中田易直・山口栄蔵そして特に安岡明教授の研究⁵⁾を参照されながら会計学専攻の小倉栄一郎教授が紹介されたもの⁶⁾を私の解釈を加えながら紹介してみよう。

大元方の計算は本支店合併決算になっていると考えられる。そして、期首正味身代が最初に計算されるわけで、宝永7年（1710年）1月1日の大元方開元目録がこれであって、開始貸借対照表に相当する。

図1の「残而」とは正味財産のことで、貸借対照表における損益計算の基準になっている金額を示す。

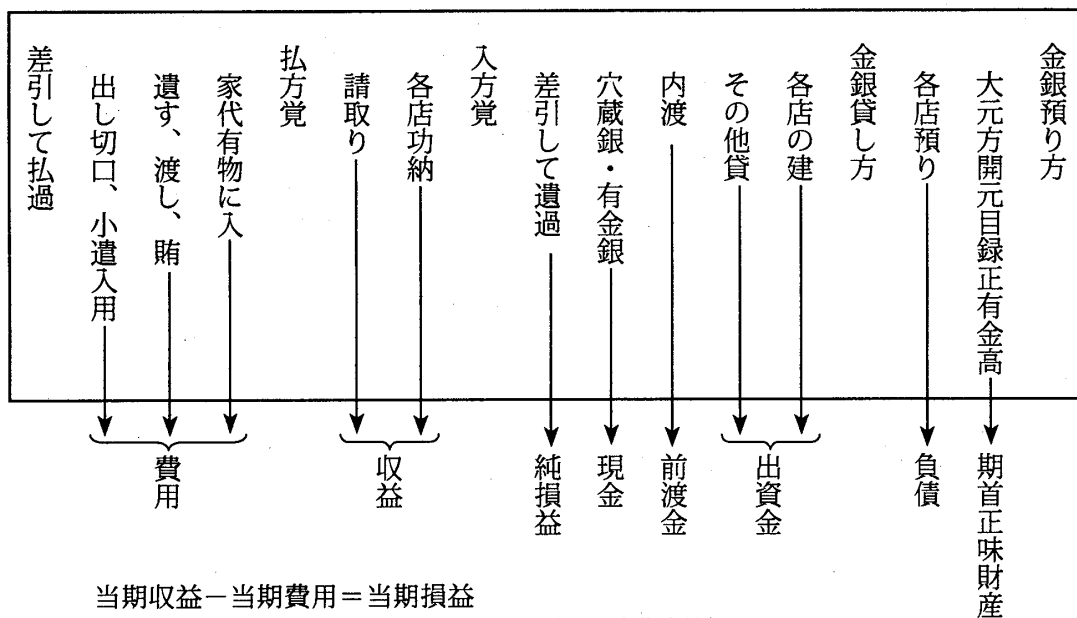
また、「内」というのは預り金（負債）を

意味していて、三井家企業内の部門であるという、いささか取扱の会計上おかしい項目がある。

そして、これとは別に、江戸と大阪の惣家の正味身代が計算される。さらに、これから準備金が差引かれる。この差引計算を別にすると、複式決算の構造が明らかになるという小倉教授の考え方は、特にめずらしいものとは思われない。当時の決算の構造が各家ごとに独立して思考された結果で、それを比較検討することがほとんどなかったためにほかなるまい。

事業年度ごとの決算である大元方勘定目録は、第1段階の計算がまず行なわれ、第2段階の計算が次に行なわれる。第2段階の計算は検索項目を必要とする江戸・大阪惣家の単純な合計計算と、定額の「枕銀」の合計計算にすぎない。

図2



当期収益－当期費用＝当期損益

期末資産－（期末負債＋期首正味財産）＝当期損益

（出典）小倉栄一郎「わが国固有の会計報告の類型」『會計』91巻5号、昭和42年5月、682ページ

これをみると、前半が貸借対照表であり、後半が損益計算書にあたることがわかるというのである。

三井大元方勘定目録は、鴻池家算用機が作られてから40年後、それから30年後に中井家店卸目録が成立しているが、その間に方法等に重要な関連性があると思われる。三井家は大元方創設のときに開始されたものであるがそれ以前の状況は不明である。しかし、その準備期間があったと考えられる。

簿記の方法を全体的に把握できるような完全な帳簿史料は、わが国では発見されていない。決算報告書あるいはその控が相当長期間にわたって保存されていることはあるが、それは歴史研究には役立っても、簿記法の研究には適当ではないといわれる。それは、簿記法そのものについて記述した会計規定とか手引書がないということである。簿記法を知るために

は、同じ年代の主要簿や補助簿が一揃でも揃っていればいいが、それは、連続した年代の主要簿、補助簿を一式揃える必要がある。ところが、毎年帳簿を改めたとは限らず、何年分もの記帳が一冊に連続してまとめられていることが多い。そのため年代がくいちがい、どれかの年で連続している。それでも、そのような形態で帳簿が残されていれば、簿記法を明確にできるが、そういうことはあまりない。決算書類が多く発見されていてその研究がすすめられているのが現状である。というのが小倉教授⁷⁾の主張であるが、それは現在もほとんどかわりない。

わが国で簿記——主に単式簿記と考えられるが——が商取引などに使われるようになったのは、戦国時代末から安土桃山時代に、近江商人たちが「覚え書き」として作成したのが始めであったように推測されるが、その証拠となるような帳簿類は殆ど残されていない。近江出身の武将である石田三成が、秀吉軍団の戦費・糧米の計算に簿記を使うのに長じていたという説が、近來の論稿にみられるが、確たる証拠のあるものでは、必ずしもあるとは考えられない。

三井家の「大元方勘定目録」は、すでに述べたように、三井家が大元方を創設した宝永7年(1710年)から始められているという論証がある。

その最初の「大元方勘定目録」が開始貸借対照表に相当することになる。この「大元方勘定目録」は「大元方開元目録」と呼ばれた。

安岡重明教授の論文の史料を引用した小倉栄一郎教授の説明によると大元方勘定目録は次のようになるといわれる⁸⁾。

図3

大元方勘定目録	
一、銀千五百貫目	本店建
一、銀千	貫目 京都兩替店建
(以下七項目各店建)	
九口合	金七千五百兩
銀四千四拾四貫百四匁六分二厘	
建之外貨	
一、銀千百貫百九拾三匁四分三厘	本店
(以下六項目各店別)	
一、金九百六拾六兩貳朱	
銀三百八拾五匁三分七厘七毛	江戸穴蔵
一、金百拾三兩三步	大仏判穴蔵有
一、金千四百六兩三步	有金銀
銀三匁七分五厘	
金壹万千七百三拾四兩	
銀千四百七拾九貫八百七拾匁貳分貳厘六毛	
惣有都合	
金壹万九千貳百三拾四兩	
銀五千五百貳拾三貫九百七拾四匁八分三厘六毛	
内	
一、銀千五百拾壹貫七百五拾五匁三分四厘壹毛	京兩替店預り

一、金三百拾六兩	銀七匁五分三厘	松坂店預り
金三百拾六兩		
銀千五百拾壹貫七百六拾貳匁八分七厘壹毛		
金壹万八千九百拾八兩		
残而		
銀四千拾貳貫貳拾壹匁九分六厘五毛		
二口銀二匁五千九百九貫四百五拾五匁九分六厘五毛		
兩替五拾八匁定		
一、金六万七千七百七拾五兩	江戸惣家有高	
銀六拾七貫五百目	五十八匁かへ	
二口銀七拾貫九百八拾匁		
二口合銀三千九百六拾七貫百三拾匁		
都合九千七拾六貫五百八拾五匁九分六厘五毛		
新建店々枕銀之預		
宝永七寅正月朔日		
一銀五拾貫目	京兩替店	
(以下六項目各店別)		
金五百兩		
銀百九拾六貫目		
二口代金銀貳拾五貫目		
引残テ		
銀八千八百五拾貫五百八拾五匁九分六厘五毛		
宝永七年寅正月朔日有物也		

大元方の開設されたときの三井家の企業全体の正味身代のこれが、計算結果であると理解しているのである。異論はあるが、小倉教授は、計算の形式に従って、次のように解釈している。

図4

建（各店別）内訳金額略 建の外貨（各店別、穴蔵銀、有銀） 内訳金額略 （惣有 19,234 兩 5,523 貫 974,836） 銀換算 6,639 貫 546,836	内（各店預り）内訳金額略 （316 兩 1,511 貫 762,871） 銀換算 1,530 貫 090,871
	新建店々枕銀 内訳金額略 銀換算 225 貫
江戸・大阪惣家 内訳金額略 銀換算 3,967 貫 130 総計 11,606 貫 676,836	残而（18,918 兩 4,012 貫 211,965） 銀換算 5,109 貫 455,965 ① 都合 銀換算 9,076 貫 585,965 ② 引残 銀換算 8,854 貫 585,965 ③

差引正味金額が3段に分けて算出されているが、その各段に意味があることは考えられるが、その詳細を明らかにできないと、小倉教授は説明している。そのうえで、結論として8,851貫余の額が、資産－負債＝資本の式にあった計算であることは明らかであるとしている。

①②③の符号をつけた正味身代のそれぞれが損益計算のためにどのような役割を果たすかについても次のように要約を引用している。

図 5

金銀預り方⁹⁾

大元方開元目録正有金銀高

一、銀五千百九貫四百五拾五匁九分六厘五毛①

(以下三店預りの項目内訳省略、その銀換算額一、五二三貫
四五二匁六分三毛)

合六千六百三拾貳貫九百八匁五分六厘七毛

金銀貸し方

一、金七千五百兩

銀四千四拾四貫百四匁六分七厘 九口物店々建二渡委細開元

目録二在

(以下本店系店の正味身代並に前払金・現金在高など、内訳は
省略)

合六千四百五拾七貫七百九拾六匁三分貳厘七毛

差引して 銀百七拾五貫百拾貳匁貳分四厘 此高遺過

入方 覚

一、銀貳百貳拾五貫目 本店功納

(以下各店別功納、宿代請求等)

合六百六拾九貫三百拾匁七分四厘三毛

払方 覚

一、金四百貳拾五兩三歩貳朱 江戸黒門町家代

銀五匁三分九厘三毛 但家方四十三番有物二入

(以下賄渡、普請方入用、出シ切口、支払利息、大元方諸事小
遣入用等)

合八百四拾四貫四百五拾貳匁九分八厘三毛

差引シテ銀百七拾五貫百拾貳匁貳分四厘払過

元 建 差 引

一、銀五千百九貫四百五拾五匁九分六厘五毛①

寅 正月 元建

内銀百七拾五貫百拾貳匁貳分四厘 正月より七月迄入方払方差引
×出過残而銀四千九百三拾四貫三百四拾三匁七分二厘五毛 寅七月十四
日正有銀

一、金七万百貳拾五兩 代銀四千六拾七貫：

(以下 大阪 江戸惣家有高)

合四千百三拾八貫貳百三拾匁

都合九千七拾貳貫五百七拾三匁七分貳厘五毛

新建店々枕銀之預

一、銀五拾貫目 京両替店

(以下各店分、内訳省略)

×銀貳百八貫四百目

差引して

銀八千八百六拾四貫百七拾三匁七分貳厘五毛

宝永七年寅七月十五日有物也

そのあと、払方覚の費目別内訳（前出）が附記されていると説明されている。

「金銀預り方」「金銀貸し方」の二部が、貸借対照表に相当し、その計算は開元目録の①の正味身代を基準にして算出されていると、小倉教授は説明している。また、「入方覚」「払方覚」が損益計算書に相当するとしている。この両計算の結果は、「此高遣過」「払過」とよばれている純損失であって、これらは一致するとしている。だから、これが複式決算構造といえる理由であるとしている。

「元建差引」は期首正味身代に期間損益を加算あるいは減算することによって期末正味身代を算出する。「寅七月十四日正有銀」がそれに相当するのである。

ここまでの計算を、小倉教授は、T字型計算表で、次のように表示している。

表1（大元方開元目録）期首貸借対照表

資産（建・建の外貨）	負債（内）
7,639 貫 546,836	1,530 貫 090,871
	正味（残而）
	<u>5,109 貫 455,965</u>

表2（金銀預り方・貸方）期末貸借対照表

資産（建・その他）	負債（預り）
6,457 貫 796,327	1,523 貫 452,602
欠損金（遣過）	期首正味（開元正有金銀）
<u>175 貫 112,240</u>	5,109 貫 455,965
<u>6,632 貫 905,567</u>	<u>6,632 貫 908,567</u>

表3（入方覚・払方覚）損益計算書

費用（有物＝入・入用等）	収益（功納・宿代）
844 貫 459,983	669 貫 340,743
	欠損金
<u>844 貫 452,983</u>	<u>175 貫 112,240</u>

表4（元建差引）期末正味身代計算（資本金 a / c）

当期欠損金（差引×出過）	期首正味（寅正月元建）
175 貫 112,240	5,109 貫 455,965
期末正味（寅7月正有銀）	
<u>4,934 貫 343,725</u>	
<u>5,109 貫 455,965</u>	<u>5,109 貫 455,965</u>

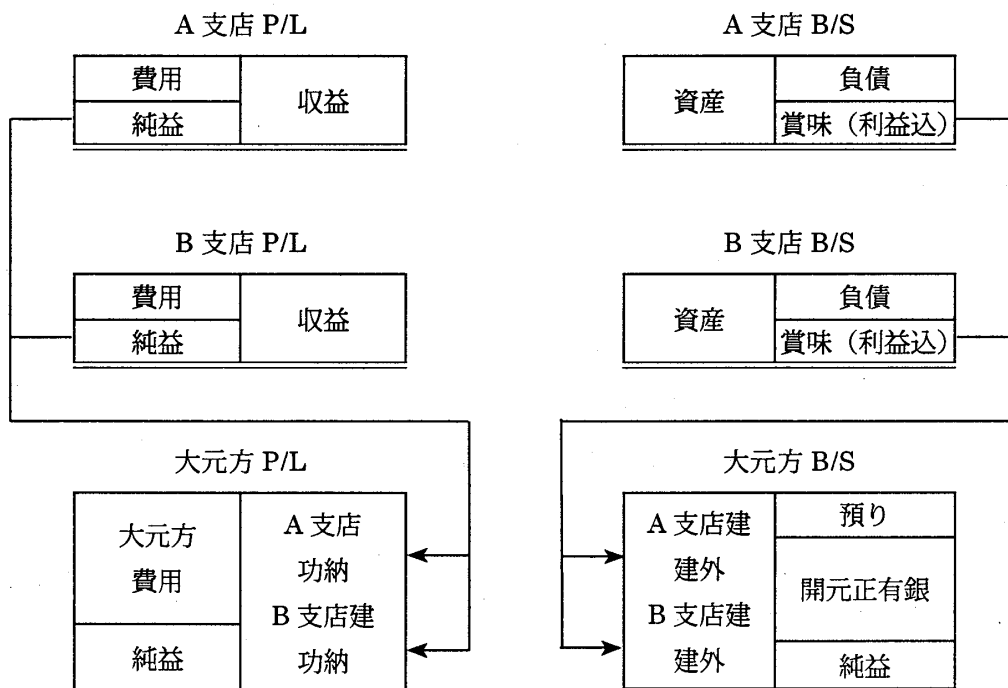
三井大元方の決算なので、これは本支店合併決算である。この合併決算は京都、江戸、大阪両替店、綿店、糸店、御用所、松坂店、小名木川の合併決算である。江戸惣家、大阪惣家は別である。その合併にあたって貸借対照表では各店の正味財産を「建」「建外」とよんで、計上し、資産の内訳を一つ一つ合算する方法は採っていないという。

損益計算についても、各店の損益計算の結果として純額「功納」を合併し、収益、費用の費目別に合算する方法はとっていない。こうして各店は、それぞれの単独決算を行なって、その報告を大元方に送付する。大元方はこれを資料にして、その結果だけを合併するという方法をとるのであると、小倉教授は考えている。

その単独決算がどの程度のものか確認できないが、「仲間出シ切仕分目録」の詳細さから推測すると、相当詳細な細目を示して構成されたものであろうと、小倉教授は推測して、これが大元方の方式と同じように複決算構造であったとしている。

この推測によって合併の模型を、小倉教授は次のように構成している。

図6



すでにのべた3種の正味身代の中で、②の額「都合、9,076貫585・965」の性格も容易に想像がつくと小倉教授は言っている。「江戸惣家有高」「大阪惣家有高」は本店、支店の会計責任に属していない何らかの財産である。したがって、単独決算では扱わない項目である。「惣家有高」は長期にわたって異同のない金額とは、いいきれない。いくらか変動するが、固定額に近いといえる。このように小倉教授は推定する。

「建」は定額であるが「建外貸し」は変動する。この両者を合計して営業に用いられている正味運転資本の額、「惣家有高」は固定資産に投下された固定資本額であることから、三

井家の決算内容は明確になると小倉教授は考える。固定資本部分の計算は除外され则认为るのである。

こうして、三井家帖合における決算は本店・支店の帖合にもとづいて、まず期末正味運転資本の計算①をおこない、これにつづいて別個に計算した固定資本を加えて、期末正味総資本の計算②を行う。

「店枕銀」は準備金と解釈されているけれども、元手銀渡しに枕銀の内ら支出してこれを大元方の払方に算入しているという処理法から推定して、営業店に対する資金割当基準といった性質のものであると考えられているという。

また「内」として掲げられてマイナス項目になっている額も、他家に対する純然たる負債ではない。京両替店、松坂店に対するものである。これらは、三井家企業全般にわたる財務構造、資本制度が、はっきりしていないので、第3の正味身代「引残」とよばれる額③については、はっきりしない。

「功納」や「御賄渡」「普請入用」などの大元方損益計算に計上された収益・費用についても、営業に関する項目のみであると解釈できないので、損益計算の性格が混沌としていると、小倉教授はいう。

結論として、小倉教授は、形式的には、三井家大元方勘定目録は「本店・支店の合併決算である」としている。明瞭な複式決算構造をもっていて、本店・支店の正味身代の合算を中核とした資産合計から、負債を差引いて求められる期末正味身代を期首正味身代と比較して損益を計算し、そして、本店・支店の純損益合計と大元方費用の比較によって損益を計算する。この両計算は一致する。

これまでの計算は正味運転資本についておこなわれる。

また附随する計算として、期首正味身代に当期純損益を加減して期末身代を求める計算、別途に算定された財産額を加算して、準備金を差引く計算がある。しかし、これは前述の複式決算構造を乱すものではない、としている。

以上が、小倉栄一郎教授による「大元方勘定目録」を「大元方開元目録」を中心としての解釈を紹介することによる説明である。

3. 大元方勘定目録の検討

大元方勘定目録の研究については、山口栄蔵、中井信彦、中田易直、梅井義雄教授もとりあげておられるといわれるが、安岡重明教授が大元方勘定目録を閲覧する機会を把まれて、論証されたものを、小倉栄一郎教授が会計学の視点から検討された。それを前述のように紹介させていただいて、大元方勘定目録の一端なりとも理解しようと試みたが、それを一歩も前進させることも出来ていない。

すでに大元方勘定目録については、単著として『三井家勘定観－江戸時代の三井家における内部会計制度および会計処理技術の研究』（白桃書房、1993年）が出版され、三井家

の帖合について詳細な研究が行なわれているが、必ずしも大元方勘定目録のみに限定されたものではない。

また、この問題について、文部科学省の科学研究費による研究が、前述の飯野幸江助教授を含めたグループの研究「江戸時代における三井大元方の経営分析および財務内容を会計政策との関連研究」（平成 13 年度～平成 15 年度）がある。

本稿は、従来「大元方勘定目録」についての研究を単にふりかえてみたもので、その確認に役立つと考えているが、前に一步でもふみだしたものとは思っていない。その確認の上に、今後半歩でも踏みだす足がかりになれば、と思っている。

注

- 1) 安岡重明「三井家初期の大元方勘定目録」『近世史研究』40 号
- 2) 小倉栄一郎「わが国固有の会計報告の類型」『會計』91 巻 5 号（1967 年 5 月）680 ページ～683 ページ
- 3) 拙稿「三井大元方勘定目録の成立の研究 (1)」(1992 年 3 月)『駒澤大学経済学論集』23 巻 4 号
拙稿「三井大元方勘定目録の成立の研究 (2)」(1992 年 3 月)『駒澤大学経済学部研究概要』50 号
拙稿「三井大元方勘定目録の成立の研究 (3)」(1992 年 6 月)『駒澤大学経済学論集』24 巻 1 号
拙稿「安永持分けに至る三井大元方勘定目録」(1995 年 3 月)『駒澤大学経済学論集』26 巻 4 号
- 4) この資料に関しては、中央区日本橋ミヤナガビル 2 階が収容、管理している。1904 年以降の資料である。
- 5) 注 1) に同じ
- 6) 注 1) に同じ。676 ページ
- 7) 小倉栄一郎「わが国固有簿記法の展望」『彦根論叢』122・123 (1967 年 3 月) 82～84 ページ
- 8) 安岡重明、前掲 (1)14 ページ